第三章「中山　准」

　翌朝目覚めてカーテンを開けると天気予報通り晴れていた。
いつもは外れる天気予報士にやればできるじゃないかと、心の中で褒める。
顔を洗い、朝食を取り学校へ行く準備を整える。
制服のネクタイを締めている途中でメリーさんは普段どこにいるのだろうなどと考えていた。
最近はメリーさんの事ばかり考えてる自分が気恥ずかしかった。
家を出てバス停へ向かう。
学校までは少し遠く、バスで１０分。そこから１０分先が学校だ。
いつも通りバスを待つ。
バスが到着し中へ入ると同じ制服の中に見慣れた顔を見つけた。
「やぁ」
「おはよう」
一歩遅れで挨拶を交わした。
一番後ろの５人が座れる席を独り占めしているこのメガネは友達の浩平だ。
正直僕から見てもなかなかの美男子で成績も優秀。先生から信頼もあるが、中学の時からタバコを吸っている事を知っているのは僕だけだ。
タバコ臭いぞと僕。
「何それは本当か、外で吸うように心がけているのだがな。つくものはついてしまうか」
いつもの用に芝居がかった口調でそう言った。こいつの親が歌舞伎役者なせいだろう。
前に家に行ったが馬鹿でかい日本庭園付きの豪邸に住んでいた。
軽く雑談を交わしているとすぐにバス停へとついた。

がやがやとバスの中の３分の２が降りる。
その流れに乗り僕と浩平も降りた。
ここから僕は自転車だが浩平は歩きだ。なんでも自転車は好かん、との事らしい。
浩平に先に行くぞといい、自転車を漕いだ。

しばらく行くと携帯が震えた。マナーモードなので音は鳴らない。
ポケットから携帯を出し、画面を確認すると案の定メリーさんだった。
僕は通話ボタンを押した。
「もしもし」
「私メリーさん、今あなたの後ろにいるの」
おいおい、と思いつつ振り向くと自転車の荷台にメリーさんが座っていた。
「！」
「きゃっ！」
僕は自転車ごと倒れそうになったがなんとか持ちこたえた。
「はぁはぁ…今のはビビッた…。」
「わ、私も驚きました…」
これは予想外、全然気が付かなかった。
自転車を漕いでいるがほとんど重みは無い。やっぱり幽霊なんだなと再認識した。
「驚かせてしまってすみません」
「いや、それが仕事でしょ」
幽霊に突っ込む僕。

「途中で見かけたもので乗らせていただきました」
やっと平常心を取り戻した僕はいつも通りメリーさんと接した。
「さっき驚いたけど…１４日加算されたの？」
「いえ、一人一回までで、同じ人は無理なんです。でも驚いてもらえて嬉しいです、ちょっと自信が付きました」
「そりゃよかった。」
他の人から見たらどう思うだろうか？
女の子を後ろに乗せて学校へ登校。恋人同士に見えるかなと、そんな事を考えていた。
メリーさん曰く今は僕以外の人間には見えないそうだ。
メリーさんは単発タイプで一度に大勢の人を驚かせられないとの事。こんな可愛い子と登校している所を他の人に見せたい気もあったがそれは叶わないらしい。
「ちょっと残念」
「え？」
「いや、なんでも」
やがて校門が見えてきた。
この二人乗りが終わるとなると少し名残惜しかった。
駐輪場へ自転車を止め教室へと向かう。
ここではメリーさんとは会話をしなかった。メリーさんと会話をしていても他の人から見ればただの独り言だ。
ただの変な人には思われたくないので。
教室に到着し、先日の席替えでゲットした窓側の席へと座る。
「それじゃあ、ちょっと友達に会ってきますね」
学校に友達なんかいるのかと聞きたかったが

「ああ」
と僕は短く小声でそう言った。
メリーさんが別れを告げ教室の扉に向かう。
それとすれ違いに浩平が入って来て僕の前の席へと座る。
「自転車は好かんが、徒歩となると不便なものだな」
「自転車を買えばいい」
「自転車は好かん」
そんな事を話していると担任が入って来た。
短く連絡事項を告げすぐにＳＨＲは終わる。担任の唯一好きな所はここだ。
さて、今日の１時間目は嫌いな英語か、嫌だ嫌だと浩平と口を揃えてそう言った。

退屈な授業を４時限こなし、待ちに待った昼休み。メリーさんは見えない。
ちょっとこれから調べる事があったのだがどうしようと思ったがこちらから掛ける事にした。
メモリーのマ行からメリーさんを選び発信、３コール目でメリーさんは出た。
「は、はい！なかや…じゃなくてメリーですっ」
「どうしたの慌てて」
「あっ電話が掛かってくる事は今まで無かったので驚いてしまって」
ああ、掛けることはあっても掛けられる事はないもんなと少しかわいそうに思った。
「今から昇降口の前にこれる？」
「はい、すぐに」
じゃあ、と言って僕から電話を切った。

昼食を１０秒チャージすると僕は昇降口へと向かった。
昇降口へと行くとメリーさんが下駄箱に寄りかかっていた。
時間に律儀。生前はさぞかし優等生だったのだろう。
メリーさんは僕に気づくと軽く会釈をした。
「それじゃ行こうか」
「どこへですか？」
「図書室」

図書室には過去の新聞が３ヶ月分まで保存されている。１年の時、図書委員だった頃に知った事だ。
病死なら新聞には載らないが、事故ならばおそらく載っているだろう。
図書室は教室棟とは真逆の教員などが使う文化棟にある。
今の時間生徒は教室で昼食を取っているので辺りに生徒はいない。
「それじゃあ行こう」
と、僕の独り言を聞かれる心配もないのでメリーさんと会話をしながら図書室へと向かった。
「そういえば友達って？」
僕は朝の疑問を聞いて見た
「ああ、花子さんです教室棟３階のトイレの」
「いるの？」
「いますよ、この学校だけでも４人の花子さんがいます」
「多いなっ！」
眩暈がした。こんな身近に花子さんがいるとは思わなかった。しかも４人…

まぁ人が死んで未練があると残るんだし普通なのかな。
「へぇ、会って見たいけど女子トイレに入るのはちょっとね」
「男子トイレですよ？」
再び眩暈がした。
あのトイレはよく利用する。もしかして見られていたのだろうか…
「今度紹介しますよ」
ああ、ありがとう…と、あまり気が進まなかったがとりあえずお礼を言っておいた。
そんな会話をしていると図書室の扉が見えてきた。
古臭い大きな木製の扉。開けにくくて有名だが、開放されていたので開館中と言う事だろう。
中へ入ると独特の紙の匂いがした。
懐かしいな、ここに来るのは図書委員をやめてから一度も来ていない。
辺りを見渡すと、本を読んでる生徒は一人もいない。だがカウンターの椅子に座っている見慣れた顔を見つけた。
弁当箱が重箱なんて奴は一人しかいない。
「やぁ、おまえが図書室に来るなんて今日は雨でも降るのかな？」
古い例えをもってくる浩平。
現、図書委員なのだからここにいるのは不思議じゃない。
「過去の新聞はどこだ？」
と、軽く皮肉を無視して浩平に尋ねる。
「うむ、それならそこの保管室の中だ。ダンボールに入っているが日付が書かれているからお前ならすぐ見つけるだろう」
ありがとうと言い保管室へと入る。
古い本など倉庫代わりに使われているらしいこの部屋はカビ臭かった。

電気をつけるとダンボールが山積みになっていた。３ヶ月以降の新聞は捨てるのが図書委員の役目だが…
あいつめ、仕事していないな。
メリーさんとともにダンボールに書かれた日付を頼りに目当ての箱を探した。
「あ、この辺りだと思います」
メリーさんがそう言った。
見ると４段積み重なったダンボールタワーの一番下に約一ヶ月前の日付の書かれたダンボールがあった。
「すごく…大きいです…」
これをどかさないといけないのかと途方にくれているとメリーさんの顔が申し訳なさそうのこっちを見ていた。
「よし、どかそうか」
女の子の期待は裏切れない。僕は立派な親父の息子だった。
一番上のダンボールは背伸びをしてやっと届く位だった。
ちくしょう、もっと背が高ければと心の中で思ったが、そんな事を考えてる余裕は無かった。
気合を入れて一番上のダンボールを引き抜いた。
僕はてっきり中は新聞紙だと思っていのだが違った。
中に入ってるのは新聞紙では無くこの重さは本、しかも重量級。
僕は思わぬ重さにふらつき背中から地面に叩きつけられた。間髪をいれずそのダンボールが顔を目掛けて落ちてくる。
「あ」
「あぶない！」
僕は顔が間違いなく潰れるのだと確信したが。
顔のすれすれでダンボールの角が止まっていた。ダンボールが宙に浮いている。
冷汗を拭いながら立ち上がる。

「どうして…？」
「よかった…間に合って」
メリーさんがやってくれたのだろうか？
「近くの浮遊霊さんに手伝ってもらったんです。ここは締め切っていてじめじめしていたので結構人数がいたので」
やがて、ダンボールがゆっくりと床に置かれる。そしてさらに、残っていたダンボールタワーも次々と下ろされていき一番下のダンボールを取り出せるようになった。
「そんな事できるのか？」
「もちろん無償ではやってくれません。こう言ったんです。滞在期間１日を譲るのでダンボールをどかしてください。」
「それじゃあ、まさか…」
「はい、４人が手伝ってくれました。滞在期間４日減です。」
なんと言うとりかえしのつかない事を。僕が注意していればこんなことにはならなかったのに。
貴重な滞在期間を無駄にしてしまった。
「ごめん…」
「いいんですよ私のためにやってくれた事なんですから」
メリーさんは笑顔で言った。残された時間は１３日になってしまったけど僕はかならずこの子にこの恩を返そうと心に決めた。
気を取り直し、一番下のダンボールを取り出す。
その中から今から一ヶ月、プラスマイナス１週間の新聞を取り出し開けたスペースに広げる。
メリーさんは一週間前から、僕は一週間後から読み進めた。
新聞をめくる音と時間だけが過ぎる。
５枚冊目の新聞のわずかなスペースに交通事故の記事を見つけた。

４月２６日、５時５０分頃。
Ｏ市西区交差点付近で同じ市内に通う高校生、中山 准（１７）が車にはねられ病院に運ばれたが死亡した。
「これだ…」
「これですね…」
新聞記事を見つけた事に多少の喜びを感じたが、次の一行でそんな嬉しさなど消し飛んだ。
「中山 准さんは轢かれた後３０分放置されており、近くに住む主婦によって発見された。なお、犯人は捕まっておらず、警察はひき逃げとして調査している。」
全身がかぁっと熱くなった。怒りとやるせなさでいっぱいになる。
「すぐ助けを呼べば助かったかもしれないのに！」
「…少し思い出しました。雨の日で、歩道を歩いてたら車が前から…。それで投げ飛ばされて川原の下に…」
メリーさんの目に涙が溜まっていた。
それを見て僕の怒りはどこかへ消えた。怒っている場合じゃない。手がかりは見つけた。
そして僕のやるべき事は二つに増えた。
メリーさんの果たせなかった事を果たす事。
それから犯人を…捜すこと。
期間は１３日。限られた時間。
僕は成し遂げることができるだろうか。
そう心に誓うと昼休み終了のチャイムが鳴った。